

B-2. お水 おいしいって飲んでるよ ～3学年の発達を追う～ 刈谷市立住吉幼稚園（愛知県刈谷市）

[3、4、5歳児]

ゴールデンウィーク明け、どの学年も自分たちのクラスの前の花壇に夏野菜を植えることになった。その中で、どの学年も毎日のように行っている水かけ（水やり）に焦点をあて、各学年の幼児の興味・関心や何を学んでいるかなど、発達の違い、道すじを追ってみた。

3歳児 事例 「大きくなあれ」「おいしくなあれ」 6月19日(火)

花壇で育てたトマトやナス、ピーマンを食べたことで「先生、赤くなってる」と野菜によく目がいくようになる。保育者は「わあ、まっかっか。おいしそうだね」と幼児と一緒に収穫し、丁寧にかごに入れていく。子どもたちは、かがんで、大きな葉の間にある実を見つけて「ナスも!」「大きい!」「これちっちゃい!」「ここも、先生」と少し興奮気味に気付いたことを保育者に伝えようとする。

収穫した後、保育者は「大きくなあれ」「おいしくなあれ」とじょうろでトマトやナスに水をかける。早速、子どもたちもじょうろや砂場のカップを持ってきて、喜んでまねをする。A児はトマトの実に“ジャージャー”としたほど水をかけ、「緑はまだだめだね。赤くなったらだね」と話す。保育者が「早く赤くなるといいね。Aちゃんのお水、おいしい、おいしいって飲んでるよ」と声をかけるとA児はにっこりして何度も繰り返す。他の幼児もナスやピーマンの実をめがけて「大きくなあれ」「おいしくなあれ」と水をいっぱいかける。その姿につられ、砂遊びをしている子も自分のスコップやお茶碗で水を次々とかけた。だんだん水遊びになり、汲んではどこにでもかけることを繰り返す。保育者は「赤ちゃん野菜、大きくなるといいね」と共感したり「もうお腹いっぱいみたい、ごちそうさま」「向こうのお花がお水欲しいって言うてるよ」ときりをつけたり、新たに続けられるようにしたりした。

☆食べたことで今まで関心の低かった幼児も目が向くようになった。3歳児は経験もなく「苗を植えて、大きくなったら…」という予測がもてないので、実際に経験してから「昨日幼稚園で食べたトマトはここになっていたんだ」と分かったり結びついたりする。その上で、保育者が水をかけて見せることで、より関心を持つことができたと思われる。

☆保育者のまねをすることで自分の中に取り込みながら、「実が大きくなって欲しい」「いっぱい水をあげればいっぱい大きくなる」と思い、直接大きくなってほしい“実”をめがけて水をかけている幼児も多かった。3歳児では、「赤ちゃん野菜、大きくなるといいね」と幼児がしていることを共感・肯定し、「昨日食べたトマトはここになっていたトマト」ということが分かることや、大きくなってほしいという思いをもって水をかけることに興味や関心をもったり、喜んで水をかけたりすることが大切と考えた。

☆水をかけることで自分たちも気持ちよさを感じている様子。3歳児は水かけも遊びの延長であることから、保育者もそれに合わせて、したい気持ちを十分に満たせるようにしたり、トマトやナスを擬人化し、言葉を添えたりしていくことで「楽しい。またやってみよう」「トマトもお腹いっぱい…もういらぬのか」と思えるのではないかと考える。

4歳児 事例 「お水あげんと（あげないと）枯れちゃうよね」 5月9日(水)

トマト・ピーマン・オクラの苗植えと、アサガオ・赤シソの種まきを終えた後、「明日からお水をかけようね」と話をすると、B児「お水あげんと（あげないと）枯れちゃうよね」C児「でも、お水あげすぎるとだめって、おばあちゃんが言った」と自分の知っていることを言う。保育者「みんなもジュースやお茶を飲みすぎるとお腹が痛くなるもんね」というとD児「すみれ組がみんなで行ったらいかんかもしれん」と言う。保育者「じょうろは小さいけど、すみれ組の子の分のじょうろのお水がみんな集まったらすごくたくさんになるってことね」

「給食のお当番さんがお水をかければいいよ」 5月10日(木)

次の日から水かけが始まった。保育者「野菜にお水あげよう」の声かけに、B児・C児・E児がじょうろをもってきて水をかける。E児は花壇にはかけているのだが苗が植わっていないところにかける。保育者「トマトのところにかけてあげて」と声をかけると苗のそばにあるトマトの絵の看板のところにかけている。保育者「ここに付けてあげて」と実際に苗に触れトマトの苗を指し示すと、大きくなずいってかけ始めた。

何日か続けているうちに関心を持つ幼児が増え、毎日のように花壇やプランターからあふれるほど水をかけるようになったため、苗を植えたときのことを思い出しながら話をすると「（毎日交代する）給食のお当番さんがお水をかければいい」ということになった。



「でも、まだこのアサガオあげてないよ」 6月12日(火)

今日はC児・F児・G児・H児が当番である。祖母からいろいろと教えてもらい、家庭でも経験のあるC児は慣れた手つきでじょうろに水を入れ、アサガオなど順番に植木鉢やプランターに少しずつ水をかけていく。その後、F児もアサガオに水をかけ、鉢から水があふれているが一つの鉢にじょうろの水がなくなるまでかけ、次の鉢のためにまた水をくんでかけ、水があふれていた。保育者が「F児ちゃん、もう、お腹いっぱいじゃないかな」と言うと、F児「でも、ぼくはこのアサガオまだあげてないよ」という返事が返ってきた。

G児は以前保育者が「オクラは毎日お水をあげなくてもいいんだって」と話したことを思い出して「先生、オクラは水あげてもいいの?」と聞いた。そこで保育者はオクラが植わっているプランターの土に触れ、「今日は湿っているからあげなくても大丈夫」と言うと、「ふーん」と言って、じっと保育者の手を見ていた。

☆植物を育てるには水が必要であるということは年少時や家庭でのことなど、今までの経験があり知っているようであった。その中で、家庭での祖母との栽培経験の中で教えてもらった「お水あげすぎるとだめ」という経験を話してくれたことから、“量”についても考えるようになった。そこで、あげすぎないために“当番制”にしたが、個々を見ると「自分がこのアサガオに水をかけたか、かけていないか」が幼児の中では基準になっていることが分かった。このことから4歳児にとって、「みんなで植える」ということが難しいため、個人鉢にして、個々でしっかりかけることが発達的に必要であったと反省した。

☆4歳児では、植物を擬人化して、自分の立場に置き換えて考えられるようにしていくと、分かりやすいということが分かった。オクラに水をかけるかかけないか実際に保育者が土に触れた時に、「土にまだお水が少し残っているって、のどカラカラにならないから大丈夫だよ」と言葉を添えるとより幼児にとって身近になっていくのではないかと反省した。

5歳児 事例 「こっちは中も乾いてる」 5月29日(火)

トウモロコシの芽は勢いよく出て、無事畑への植え替えを終えたが、トウモロコシとは対照的にエダマメの芽はほとんど出てきていない。そこで、毎日、芽が出ることを期待して、グループごとに植えたポットにきちんと水かけをしてきたクラスの子もたちと話をすることにした。

かろうじて芽が出てきたグループのポットを見せながら「同じ日に植えたのに芽が出てこないのはどうしてかな?」と聞いてみる。I児は「お水が足りなかったんじゃない?」「お水大事って言ってたもん」と以前話していたことを思い出して答える。保育者が「毎日様子を見ながらお水をあげてたのに足りなかったのかな」とつぶやくと、J児は「お水は土を触って見て、濡れてない時にあげるんだよ。あげ過ぎもよくないって」とI児の考えに付け加える。K児は「ポットからこぼれるくらいいっぱいあげちゃってたこともあったよね」と反省するように言う。保育者も「水あげすぎて悪くなっちゃったのかな」ともう一度考えられるように話すと、「多分そうだと思う」と口々に話す幼児たち。

そして、幼児とともに土の中はどうなっているのかと、ポットをひっくり返してみると、腐った種が何粒か出てきた。「こんな風になっちゃった」と残念そうな顔をしていた。

後日今度こそ、と慎重に土の湿り具合を確かめながら水をかけていた。

☆毎日の水かけの中で、水をかける必要があることを知っている。また、あげ過ぎもよくないということも知っている。しかし、あげ過ぎるとどうなってしまうかは今までの幼児の経験にはなく、あげ過ぎて、今回「芽が出てこない」ことを体験し、友達と「どうしてなんだろう」と思いを巡らしたり、友達と考えを出し合ったりした。そして「どうなっているのだろう」と実際に見てみることで「腐ってしまっていたんだ」ということが分かった。この中で幼児は実体験を通して“水をあげ過ぎると種が腐ってしまう”ということ学んだだけでなく、友達と考えを出しながら「どうなっているのだろう」と知りたい・見たいという好奇心が湧いてきたり「ああ、こんな風になっちゃった」と残念に思う気持ちを味わったりすることができた。

このように「植物に水をかける」という活動一つの中でも、幼児の科学する心の成長が見え、3・4・5歳児の発達が見えてくることが分かった。

ポイント

保育者のまねから始まり感じたことを表す3歳児。植物を育てるのに水が必要なが分かり、「どのくらい?」という量を考える4歳児。水をあげているのにポットによって様子が違うことから、自分たちのしてきたことを振り返り、水の湿り具合を確かめて水やりをする5歳児。日常の場面の、子どもたちが何気なく行っている水やりでも、3、4、5歳児の様子の違いに注目することで、「科学する心」の育ちや各年齢の発達が見えてくることが分かりました。姿の違いを通して把握できたことを手がかりに、他の場面でも「科学する心」の育ちを捉えることが期待できます。